救世軍公報

GOOD NEWS
# ときのこえ

War Cry

1月号
福音版
2025
January
No.2881

二〇二五年　一月一日　発行

明治二十八年創刊　福音版・毎月一日発行　広報版・奇数月十五日発行

## 新年の抱負は何ですか？

司令官　スティーブン・モーリス

新年は抱負についてよく尋ね合います。新しい年を新しい気持ちで始めるため、ジムに通うことやダイエットについて話す人も多いでしょう。世界的に見ると、ジム会員の約一二パーセントが一月に入会し、その半数は六カ月以内にやめ、約一四パーセントは二月一日までに通うのをやめるそうです。

私も長年、自分なりの抱負を立ててきましたが、一月中旬にはうまくいっていないことに気づき、断念してしまうことがありました。歴史や聖書は、新年の抱負についてどう語っているでしょう？

新年の抱負の習慣は、約四千年前に古代バビロニアで始まりました。当時の新年のお祝いは三月中旬で、作物の植え付けと共におこなわれ、豊作を神々に祈願していました。ユリウス・カエサルがローマ暦を一月一日始まりに変更した時、新年を祝う伝統が一月に移りました。

初期のクリスチャンたちは、新年を反省と変化の機会として用いていました。キリスト教会では、大晦日の午後十一時から特別な祈りの集会をおこなうところがあります。過去一年、神が誠実と善意をもって祝福してくださったことを振り返り、新年に神の祝福を求めるのです。そのためには、神の御言葉である聖書を読み、そこに記されている約束を心にとめることが必要です。

二〇二五年は、新年の抱負を少し違った角度から考えてみたらどうでしょう。聖書を読み、新年に何を求めるべきかを考え、祈るのです。聖書の中で、神の誠実さを約束している次のような箇所を読むことが大きな助けになります。

「わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。」
（エレミヤ書29章11節）

「主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない。それは朝ごとに新たになる。」
（哀歌3章22、23節）

「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。」
（フィリピの信徒への手紙4章6節）

「初めからのことを思い出すな。昔のことを思いめぐらすな。見よ、新しいことをわたしは行う。今や、それは芽生えている。」
（イザヤ書43章18、19節）

「……キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」
（コリントの信徒への手紙二5章17節）

「心を尽くして主に信頼し、自分の分別には頼らず　常に主を覚えてあなたの道を歩け。そうすれば　主はあなたの道筋をまっすぐにしてくださる。」
（箴言3章5、6節）

二〇二五年を迎え、今年は自分の力や意志だけで抱負を守ろうとしないでください。変わることなく常に一貫している神の誠実さに頼りましょう。

新年に、神の約束に焦点を当て、すべてのことに神を認め、神の力によって努めるようにしましょう。私たちがどんな状況にあっても、神は一年を通して共にいると約束しておられます。

神の約束は真実で確かです。そうすれば挫折感を味わうことなく、神の変わらない誠実さに励まされ、勇気を得ることができるでしょう。

新年おめでとうございます！

（救世軍士官〔伝道者〕）

信仰の体験談　証言のページ

# お恵みをいただきっぱなしの人生！

妹尾　美子 さん
（岡山小隊所属）

## 生い立ち

私は、岡山の一般的な核家族である家庭に三女として生まれました。二人の姉との間に年齢差があり、末っ子であまり構われず、自由奔放に成長しました。近くの伯母（母の姉）のところに小学校低学年の頃から土、日、ひとりで泊まりに行っていました。その頃、学校で壮絶ないじめに遭い、また、いじめる側に入ってしまったこともあり、家庭での不和や孤独も経験していました。

伯母は独身で、祖父と暮らしており、タバコと「キムラヤのパン」（岡山ではポピュラーな老舗チェーン店）、映画のチケットを扱う自営業を営んでいました。伯母は宗教そのものが「良いもの」と思っていたようで、節目節目にお寺にも連れて行かれましたが、ミッション系の女学校を出ており、その感化は今も強く残っているようです。当時、ピカピカのきれいな十円玉を献金用にためていて、「金貨をもって教会（日曜学校）へ行っておいで」と、それを持たせて徒歩三十歩ほどのところにあった教会の日曜学校に通わせてくれました。伯母の家では姉妹喧嘩からも解放され、おやつも独り占め、ピアノもあって穏やかな暮らしを満喫できました。

小学四年生の時、伯母と暮らしていた祖父が亡くなりました。一人になってしまった伯母が子ども心になんとなくかわいそうな気がして、親に相談することを決めました。愛情表現が苦手な母は「食費が助かるわ」とそれを認めてくれました。伯母はいつも商売で忙しくしていましたが、手先が器用なこともあり、私の小学校の夏休みの宿題の工作は、伯母が自ら意欲的にすばらしすぎる作品を製作したこともありました。（先生にはバレていたと思います。）普段伯母が商売をしている横で、私はひとり遊びが上手になり、ナイフで段ボールを切り、小部屋を作ったり、自分用の料理をつくったり（炒めただけの味なし野菜炒め）、マッチで火をつけ、薪をくべて五右衛門風呂を沸かしたり……、危ないと思われる事も、伯母は規制せず、口出しせず、私の好きなようにやらせてくれました。多少の反抗期もありましたが、これといって困らせた記憶はありません。（困らせていたのかも……）

その頃、通っていた小学校のブラスバンドに加わっていました。

## クリスチャンになったきっかけ

中学生になってから、この小学校のブラスバンドイベントで、卒業生代表としてトランペットを演奏したことがありました。この時たまたまその演奏を聞いていた、当時の救世軍岡山小隊（教会にあたる）の士官（牧師にあたる）の方が、「この子が小隊に来るように」と願って祈っていたことを、後から知りました。

母は教育にとても熱心で、中学生になった私のあまりの成績の悪さに危機感を抱き、「このままでは高校進学は難しい。何とか県立高校に入れないか」と、あちこち情報収集をしていたところ、私の同級生が救世軍で英語を習っていると聞き、すぐに私を小隊に連れて行きました。私は勉強嫌いで、すでに別の数学塾に行かされていたので、これ以上塾には行きたくありませんでした。しかし、母は意見を曲げないとわかっていたので、仕方なくついて行きました。二人の姉は成績が良く、岡山でも上位の県立高校にすんなり入り、大学へも行きましたが、私はそうはいかなかったので、母は焦っていたのだと思います。母は、私を小隊に連れて行き、「先生、この子を礼拝に行かせますから、英語を教えてください」と当時英語を教えていた士官の方に直々に頼んだのです。

こうして、私は日曜日には小隊へ行くようになりました。母は「教会へ行くのはいいが、深入りはだめ」と言っていました。宗教は、お金を取られるところ、と

小学生の頃、伯母と。猫をたくさん飼っていました

母と姉二人と。母に抱かれているのが私。ずいぶん重そう！

の思い込み、警戒心があったようです。私は、聖別会（礼拝）に参加するようになり、同年代の友達と過ごすことが楽しく、勉強だけでなく、小隊でもしていたブラスバンド練習にはまり、小隊にどっぷり入り浸る（笑）ようになりました。でも何とかギリギリで県立高校に合格することができました。

私の信仰は、中学生時代の小隊で過ごした時間（英語の勉強、バンド練習、眠っていた聖別会?）の中で身につきました。いつとは言えないのですが、例えば、子どもは親と一緒にいると親であることを疑わなくなるように、神様を疑わなくなっていました。神様は私にとってあまりにも当たり前の存在となりました。たまには反抗したりすることもあったかもしれませんが。そのうち、聖別会でピアノの奏楽をするよう勧められました。とてもできないと思いましたが、嫌ではなく、奏楽の役割をもらったことがうれしかったのを覚えています。最初はなかなかうまく弾けませんでした。その後も失敗は重なりましたが、だんだん弾き方もわかってきて、度胸もついたようです。これは私の人生で大きな経験でした。私は小さい頃から人前は苦手、目立ちたくないと思っていましたが、そこから引きずり出されてしまいました。後には聖別会の司会もさせていただくようになりました。末っ子で、家では特に役割がなく、頼りにされることもなかったので、小隊で役割があることのうれしさ、そのような機会があることの喜びを知りました。小隊で過ごす心地良い時間の中で、自然に神様がだんだんわかって信じていました。今振り返ると、年々その確信が強くなってきたように思います。

中学生時代、小隊で士官の方とデュエット。居心地が良い小隊にどっぷり浸かっていました

結婚式、夫の道明と

## 神様の恵みと導き

就職する時も、母は大変心配したようで、小隊に相談に行きました。小隊に来ていた方が紹介してくださった会社に就職しました。そして、そこで働いていた人と結婚しました。小隊で結婚式を挙げ、娘を与えられました。

家庭をもつようになって、様々な問題の中で家から離れることができず、しばらく小隊に通えなくなった時がありました。自分では祈ることもできず、解決もわからず、それどころか「神様なんていないんじゃないか?」と神様を自分の中から消し去ろうと思ったこともありました。小隊の働きに加わることのできないうしろめたさを感じる辛い時期でした。でも、そのような時に「祈っています」とお便りをくださった方々に心から感謝しています。祈れなくなった私のために、祈り続けてくださった方々がおられた恵みは大変大きなものでした。義理の両親との良い関係にも助けられました。

父が亡くなった時、母は小隊での葬儀を希望しました。そして、母の亡くなった時、世話をしてくれていた姉が、その葬儀を小隊で、と言ってくれました。母は亡くなる直前に、「伯母のためにも、あんたを生んでおいてよかった」と言ってくれました。母から肯定的な言葉をかけてもらったのは、この時が初めてでした。

結婚後、私は伯母の家から出ましたが、十年前、伯母が自宅で倒れ、一カ月間入院し、退院後、一人での生活が難しくなりました。夫はすぐに私を育ててくれた伯母の同居を提案してくれました。夫への信頼が新たにされる経験でした。その後、義父が自宅で倒れ、施設に入所しました。その日、老々介護で疲れ果てていた義母に同居を勧めると、すぐ承諾してくれて、義母と同居することになりました。現在自宅で、九十七歳の伯母、八十七歳の義母のお世話をしていますが、このことは、私自身の自信に繋がって感謝しています。義父は昨年亡くなりましたが、伯母も、義母も夫も救世軍で自身の葬儀をすると決めています。夫の家は仏教ですが、お墓も整理して救世軍の墓地に移したいと言っています。私が家族にそのように勧めたわけではありませんが、家族が教会につながる方向に選択してくれていることを感謝しています。

伯母と暮らしていた家は築約七十年で、大変傷んでいたので、近隣や通行人に迷惑がかかったらと心配でした。伯母は解体や売却には反対で現状維持を望んでいましたので、どうすることが最善なのか、神様に答えを求め、祈っていました。同居を始めて七年後、伯母はこの家のことを私に任せると言ってくれました。とりあえず建築関係の親戚に頼んで解体し、その後、現場に伯母を連れて行った時、ご近所の方々五、六人とたまたま道端で再会できました。伯母の元気な姿に皆さんとても喜んでくださいました。その様子を見た時に、「伯母のため、地域のために、ここに家を建てたい」との思いが沸き起こりました。資金もたまたま備えられ、二〇二三年四月、伯母の家を建て替えました。新しく建った家は、今はボランティアをする人の準備や休憩場所として使っています。今後はA型、B型事業所の手伝い（作成された作品の展示販売）や、人通りもあるところなので、十二月の社会鍋設置も計画中です。

## これからの期待

若い時は信仰のことを周囲に話しづらかったように思いますが、今は言えるようになってきました。疑問を感じる家族にも、それを説明できるようになり、感謝しています。

今まで神様からお恵みをいただきっぱなしの人生、そして多くの人に助けられた人生でしたから、これから「誰かのために何ができるか?」を、祈りながら模索中です。

神様がきっとすてきな計画を立ててくださっているので、神様の声を聞き逃さないように、しっかり心を向けて、すべて神様にお委ねし、歩んでいきたいです。

創立者　ウイリアム・ブース　大将　リンドン・バッキンガム（万国本営　英国ロンドン）　日本司令官　スティーブン・モーリス（救世軍本営　東京都千代田区）

## WINDOWS on the ARMY WORLD　世界をみつめて

### 〈緊急支援〉タイの洪水
### ―チェンライ県支援

昨年、タイ全土での深刻な洪水により、約25万人が影響を受け、そのうち約10万人が子どもたちと推定されています。100件以上の負傷者と2人の死亡者が報告されています。洪水と地滑りにより、約5,900世帯の家屋、生計手段、そして医療施設、学校、水源、高速道路、橋梁などの重要インフラに広範囲な被害が生じました。最も被害が大きかった地域は、チェンライ県メーサイ郡、チェンマイ県です。

チェンライ県の一部地域では水位が下がり始めていますが、多くの住民が帰宅できないなど、依然として大きな課題が残っています。冠水した道路や垂れ下がった送電線が、通信や復旧活動の妨げとなっています。救世軍の調査担当者が、チェンマイ小隊（教会にあたる）の小隊士官（牧師にあたる）や社会事業担当者と協力して調査したところ、チェンライ県メーサイ郡、チェンマイ県の最も被害の大きい地域では、

数千人の人々が飲料水、主食、避難所の深刻な不足に直面していることが判明しました。

洪水被害を受けたコミュニティを支援するため、タイの救世軍は信頼できる地元のリーダーと協力して緊急支援を提供しています。この支援活動は、チェンライ県の500家族を対象に、この困難な時期を乗り越えるために必要な飲料水、食料、寝具を確実に提供することに重点を置いています。各支援パッケージには、米10kg、食用油1リットル、インスタントラーメン1箱、毛布1枚、バケツ1個、水のボトル12本が含まれています。

タイ北部の洪水は人道的危機を引き起こしており、即座の行動が必要です。救世軍は、地元のリーダーやコミュニティのメンバーと協力して、最も緊急を要するニーズに対応し、被災者の復興を支援することに尽力しています。

（2024年10月30日現在）

タイ被災地での支援活動の様子

### 〈緊急支援〉スペインの洪水

スペイン東部で数時間のうちに1年分の雨が降った後、10月29日、バレンシア州全域で激しい洪水が発生し、数千人が孤立しました。強風や竜巻を伴う豪雨により、200人以上が命を落とし、数十人が行方不明となりました。

デニアとアリカンテにある救世軍の小隊から派遣された士官、信徒、ボランティアのチームが、デニア市議会と協力して直ちに支援活動を開始しました。小隊は衣類、水、食料を配布するために建物を開放しました。多くの洪水被害者は、道路の封鎖や車の堆積、大量の泥のため、当初は被災地へのアクセスが制限され、帰宅できない状況でした。救世軍は500リットルの水、医薬品、長靴、家屋から泥を除去するための道具、個人衛生用品、子どもや赤ちゃん用品、1トンの保存食、80リットルの漂白剤を配布しました。救世軍のメンバーは引き続き被災地を訪れ、ニーズを確認し、コミュニティに最適な支援方法を模索しています。

（2024年11月7日現在）

## 救世軍とは？ What is The Salvation Army?
### 心は神に　手は人に　Heart to God, Hand to Man

救世軍は、世界134の国で活動するプロテスタントのキリスト教会で、国際本部は英国ロンドンにあります。1865年、英国のメソジスト教会の牧師ウイリアム・ブースと妻カサリンによって始められ、東ロンドンのスラム街で困難な生活状況にある人々に助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。

日本では1895（明治28）年に英国から士官（伝道者）が来日して、救世軍の働きが始まりました。日本人で最初に救世軍士官となった山室軍平は、平易な言葉で聖書のメッセージを伝え、小隊（教会にあたる）を拠点として伝道を進めるとともに、廃娼（はいしょう）運動や結核療養所の設立をし、日本の医療、社会福祉分野での先駆者の一人にも数えられています。現在、日本では小隊、病院、社会福祉施設（児童、高齢者、女性、アルコール依存症者）での働きを進めています。

### ☆『キッズ・ゴスペル』コーナー☆
（子ども向け紙面）

左のQRコードから、今月の『キッズ・ゴスペル』を閲覧できます！　聖書のお話も動画で見られます。ぜひ、ご覧ください！

救世軍公報　ときのこえ
発行日　福音版／毎月1日、広報版／奇数月15日
定　価　福音版／1部40円、広報版／1部100円
（税込）　クリスマス特集号（12月1日号）／1部100円
振　替　00180－5－4400
発行兼　救　世　軍
印刷人　代表者　スティーブン・モーリス
編集人　山谷　真
発行所　救世軍本営　https://www.salvationarmy.or.jp
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17
電話　03-3237-0881（代表）
Mail　jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org
印刷所　ピーアンドエス
@SArmyJP　SArmy_JP　救世軍 The Salvation Army

聖書は新共同訳を使用しています　©共同訳聖書実行委員会 © 日本聖書協会　救世軍は、旧統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、下記救世軍にご相談ください。

【取り扱い支部】

救世軍への連絡をご希望の方は、以下の項目及び住所氏名をご記入の上、救世軍本営（左記）、もしくは、上記救世軍にご連絡ください。
・私の近くの救世軍を紹介してください。　・キリスト教についてもっと知りたいです。
・『ときのこえ』の購読を申し込みます。　・相談を希望します。